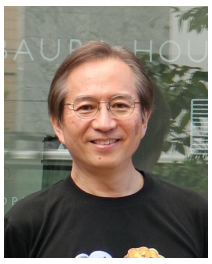
こども目線でおもしろさを探そう！

こどもケンチク新聞

第17号
2024年1月
編集発行：こどもケンチク新聞社

この人に聞きたい



情報スタビライザー
ジャーナリスト
下村健一さん

今回のインタビューは、メディアリテラシーの教育を行っている下村さんです。「人から話を聞く」とはどういうことか、うかがいました。

「聞く」ってなんだろう

相手の本音を聞きだすための工夫はなんですか

インタビューを始める時にまず「今まで受けてきた取材で何かご不満がありますか？」という質問をします。「これまでの取材で自分の思い通りに伝わらなかったことなどがあればお話しください」と言うと、一気にその人の一番言いたいことが出てくるんですよ。取材の基本は会う人についての本や資料を読んで調べておくことですが、僕は目の前にいる人を信じるということを大事にしています。

予想していたのと違う答えが返ってきたら

もちろん、相手が何を言いたいかが優先です。例えば取材者が言いたいことを言うために相手に会いに行く取材は、空らん穴埋め問題を作って「ここを埋めてください」と言うようなものです。でも本当の取材は、「好きなことを書いてください」という、自由記述問題のようなものです。取材する側が伝えたい答えを相手が言うまで何度も聞き直す、枠にはめるような取材も実際にはあるんですけど、それでは何のために取材に行くのはわからないですよね。僕はそれは絶対にしないようにしています。

一番伝えたい事を見極めるにはどうすれば

「この人が言いたい事は何だろうなあ」「あ、ここはポイントだな」とか、「みんなに知らせて共有したいな」と思うことに出会うように、その場でちゃんと聞いていくことですよね。

僕はそもそも、こういう場を「取材」って考えないようにしているんです。対話だと思っています。だって「取材」って「材料を取る」って書くでしょう？　そういう考え方はとても失礼だと思うから、「対話をしに行く」と考える。その結果、「へぇ～！」と思ったことをみんなにも伝えたいと思って書いています。この「へぇ～！」が、「ニュースバリュー」なんです。

取材した人を読者に好きになってもらうには

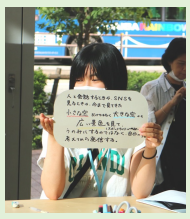
実際のマスコミの取材は、好きになるためにするとは限らないんです。例えば、その人が何か犯罪を犯しているかもしれなくて、それを暴きに行くという取材もある。だからケンチク新聞で、対象者の人を好きになってもらいたいという取材である場合に限って言いますね。

相手は決して、自分をアピールすることのプロではないから、本人には悪気はなくても客観的に見て、「あ、その言い方は損かも」ということが結構あるんですよ。

そういう時は「こういう表現で伝えてもいいですか」と、一緒に伝え方を探していきます。この言い方だとせっかく話してくれた人のイメージに誤解を与えるな、ということがないかどうか、伝えるプロとしてのチェック、それはすごくします。キーワードは「正確さ」「明確さ」「優しさ」「易しさ」ですね。これをチェックしてから伝えることは、かなり大事です。

ただ、ちょっと脱線になるけど、本当はインタビューってもっとシビアなものなんです。例えば僕は「トリカブト事件」（＊注：１９８６年に起きた、猛毒を使った保険金目的の殺人事件）で、犯人ではないかとみんなに怪しまれていても逮捕の決め手がなかった、その人の家に行ったことがあります。自分一人で行き、「先入観なしであなたの考えを聞きたい」とインタビューを申し込みました。するとその人は「そうですか」と言い、「どうぞ」とスッと僕にお茶を出した。さあ、それを飲むべきか？というきわどい場面です。でもそうしないと信頼関係が作れない。これは分かれ道でした。僕はそのお茶を飲みました。そうしたらその人は、自分の主張を語り出したんです。その報道の結果としてその人の主張の矛盾が見えてきて、その後捜査が入りました。結局その人が犯人で、その家にはまだ毒が置いてあったことが判明したんです。だから、ちゃんと話を聞き出すのは、生半可（なまはんか）なことではないんです。

2023年8月～24年1月まで4回に渡り、コドモチョウナイカイ主催のメディアリテラシーの講座がありました。そのシリーズ初回講師が下村健一さんでした。小学校の国語の教科書でその文章に触れた人も多いでしょう。新聞やTV、ネットなどさまざまなメディアを通して私たちは多くの情報に触れています。その情報をどのように受け取り、伝えればいいかを、とてもわかりやすく楽しく学べる講座でした。



今までで一番印象に残った取材は何ですか

世田谷一家殺人事件の特集を作るための取材です。ご遺族に協力をいただいたのだけど、亡くなった子ども達の使っていた日用品を撮影していたときに「なぜその必要が？」と聞かれたんです。その時に僕は、「事件が起きる前にはこの一家にもみんなと同じ普通の幸せな生活があり、それが突然奪われたことを伝える必要がある」と説明して、納得いただいたことがあります。これは「伝える」ことの大切さをわかってもらうように説明して、その行動を実現することがいかに大切かということ。その時はそれが相手に伝わって、今も信頼関係が続いています。ケンチク新聞でももしかしたら相手の成功体験だけではなく、失敗体験も聞くことがあるかもしれないけれど、ただの好奇心ではなく、それを伝えようと思う理由を自分たちの中でちゃんと理解して、納得してから話を聞きに行くことが大事だということです。

「聞く」を自然界のものにたとえると

誰にも見えていない、本人にすら見えていないものを集めてきて形にしてみせること。それって植物の光合成みたいなものだと思います。日光を受け入れて違うものに変換して、栄養源としていく感じが、すごく似ている気がします。あと、取材やインタビューって、建築にもとても似ていると思うんです。クライアントと話をして「こんなのがあるといいな」という思いを、一緒になって形にしていく建築は、対話して記事にしていくプロセスと同じだと思います。良い記事の条件の一つは「建設的」であることです。ただ批判だけの記事は破壊的でいい社会は生まれません。「だったらこうしていけばいいね」ということがわかる建設的な記事が、新しい社会を作っていけるんじゃないかと思います。

インタビューの前に記者が参加した、メディアリテラシー講座の内容については、次号で詳しくレポートします。

こどもケンチク新聞社：伊東建築塾子ども建築塾 塾生・OG有志：Joe、あおい、ゆか、ゆず、かえで